



図5:『がちゃがちゃ』完成形

『がちゃがちゃ』と題したこの作品は、文字通りがちゃがちゃとした私の世界を詰め込んだ作品だ。後ろでは私の外側と内側の言葉を並べ、核となるがちゃがちゃには私の今まで生きてきた証を詰め込んだ。この作品は私の16年間を詰め込んだ、私のドッペルゲンガーのような作品だ。

《制作ノートから一部抜粋》

- ↓ 正論 正義感 周りの評価 数字に囚われている
- ↓ 諦めたよ 「ちゃんと」しないと(笑)
- ↓ 気づいたら都合の良い子になっていた
- ↓ 過去に囚われている 真面目に ありきたり
- ↓ 結果も欲しい 本当は違う 夢と現実
- ↓ しんどい いいな 辞めたい 生きてるだけで
- ↓ 褒められたい!!! 劣等感 できない子
- ↓ それでも描きたい 書きたい 本は理想郷
- ↓ ありのまま 認められたい 私自身を見てほしい

本音

宝箱 / 箱庭 / 懐い出のがちゃがちゃ
 温もり 暖かさ 懐かしさ 思い出 人の心に触れる作品
 付箋にかいたやついっぱい貼り付ける

(3) 考察

制作段階におけるチュートリアルで、初めて意見の衝突がおきた。Aさんの作品の完成形が理解できず、筆者が軽はずみなリアクションをとってしまったことが原因である。本気で考えているからこそ、鑑賞者にその気分を伝えたい。そして作品自体も評価されたい。そのような感情が先行し、時にはネガティブな言葉も散見された。このような出来事から作品は更に強度を増す結果となったが、ナラティブをコントロールできずに必死に泳ぐような制作プロセスを経て、半ば苦しみながら作品を完成させた。1年次の集大成となるこの作品で、結果的には「立体部門グランプリ¹²⁾」を受賞し、翌年の近畿大

会の展示作品に選出される¹³⁾に至ったが、「作品化する」ことへの明確なビジョンは見えていないのかもしれない。作品は多くの票を集め沢山の感想をもらう結果となったが、彼女自身の制作の旅は終わらないと感じた。

気づいたら都合の良い子になっていたという言葉から、Aさん本人から湧き出る表現をかたちにしてているとは言い難く、どこか他者を意識した作品へと変化させていたのかもしれない。それ自体悪いことではないが、自らが納得いく作品として生み出すにはどうすればよいのかについて話し合った。

3-3 作品Ⅲ『世界の拡張』

(1) 作品概要

1年次に2点の作品を制作し、それぞれ、発想段階・制作段階・完成段階・発表後の各視点から「ナラティブ」を可視化してきた。1年次の春休みにそれらを省察する意味でも、Aさんの作品の世界観を強めることについて『世界の拡張¹⁴⁾』というキーワードを用いて対話を重ねた。

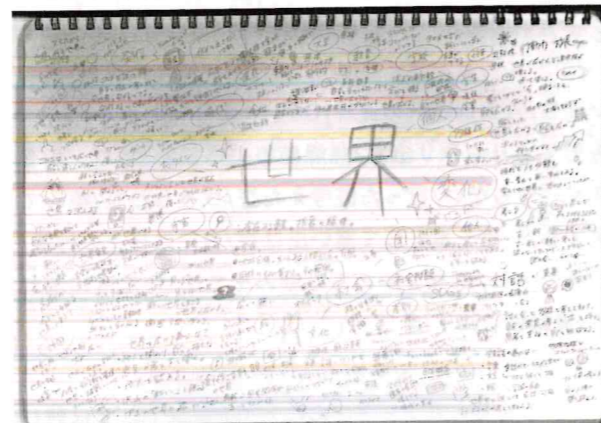


図6:『世界の拡張』完成段階時の思考メモ

Aさんの大きな特徴として、感じ考えたことを爆発的な熱量と共にメモとして残せることが挙げられる。そこには彼女の思考の断片がナラティブとして表出し、文字通り世界を形成しているように伺える。その対話の中で「壊す(図6では「変化という言葉での記載が残っている」)」という言葉が出てきてから、Aさんの行動が加速していく。これまでの『思考錯誤』『がちゃがちゃ』に共通する「破綻の匂い」を文脈化する糸口となる言葉が「壊す(変化)」であることが見えてきたのだ。

その時の言葉を記載し、考察へと繋げていきたい。

(2) ナラティブの記録

破壊 / 人との関係 涙腺 / 反抗 / 成長

壊れて強くなる。流行なんて分からないし、知らないし、制服だって似合ってるか分からないけど。もう

すぐ壊れるこの時間に、まだもう少しだけ浸かっていたい。どうして春は青いんですか。どうして物は壊れるんですか。どうして3年間しか無いんですか。聞きたいは鳴り止まないのに、時間は酷一刻と過ぎてゆきますね。いつか壊れるこの時間を、ここに置いて良かったと思えるように、そんな風に過ごすことができたなら、それはきっと幸せです。

白と黒があるように、破壊を成長ととるように、相反して溶けない昨日も、絵の具に染められた今日も、言葉を考えて紡いで交して、毎日壊れて創られて。塗り替える毎日が楽しくて仕方がなくて、でも時間は足りなくて。

壊れるのがどうしようもなく惜しいから、せめて忘れないようにとがむしやりに書き留めていよう。

(3) 考察

『世界の拡張』内で紡がれた言葉には、Aさんの等身大のナラティブが散りばめられている。破壊という暴力的な言葉をキーワードに展開されているが、その文体はとても優しく、文字通り『世界の拡張』することに成功している。特筆すべきは、その文体がより物語性を帯びており、ひとつの歌詞のような特性を持ってきたことにある。ナラティブを俯瞰して捉え、彼女にしか生み出せない世界観となって立ち上がっている。

Aさんはこの作品を最後に2年生へと進級し、最後の作品へと向かっていくことになる。

3-4 作品Ⅳ『∴』

(1) 作品概要

2年生に上がると気持ちも安定し、更に説得力のある作品を制作したいと考えるようになる。上半期は個人制作を一旦中断しチームや部活動内での制作を軸に展開してきたが、2021年8月から10月にかけての2ヶ月間で、高校生最後の対策となる『∴(ゆえにと読む)¹⁵⁾』を完成させる。ナラティブの質も向上し、完成度が大きく飛躍した半立体作品である。

この作品では、過去3点の作品の特徴である「混沌さ」をあえて全面に押し出し、更にはそのタイトルさえも鑑賞者の想像力に委ねてしまう手法をとっている。そうなった経緯は、前作で明らかとなった「壊す(変化)」を受け入れたことが大きい。Aさんの共通テーマである「自己表現」を最大限に可視化した作品と言える。

(2) ナラティブの記録

今作の制作段階で生まれたナラティブにも、これまでの苦悩を乗り越えたかのような記載が目立つ。図7に示した作品コンセプトと共に、図8では、作品の見えにくい箇所「∴ 私は美術が好きです。」という今作の結論

としてのメモを貼り付けている。

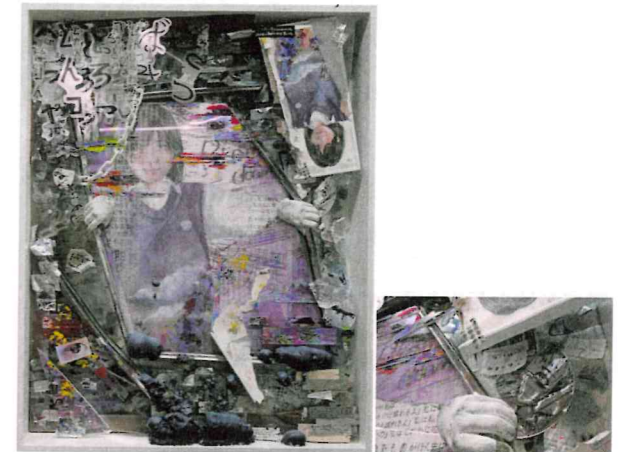


図7(左):『∴』完成形

図8(右):作品に隠された「∴ 私は美術が好きです。」のメモ

以下、完成段階の振り返りの一部を掲載し、そこから読み取れることを考察したい。

∴と題したこの作品は、レンチキュラーを使い、自画像と言葉で満ちた私の画面とを対比した2画面に分けて構成されています。沢山の考えや想い、私の全てを言葉に変えて、美術と向き合うが故の苦悩や想いを作品にしました。

タイトルが∴なのは、辛いこととか辞めたい時とかいっぱいあったのにここまで続けられたのは、やっぱり美術が好きやったからゆえにだからとか、好きな瞬間とか昂る瞬間とか、自分を認めてあげられる瞬間が美術にはあるから、美術はいつも私の大事な何かの理由になっているんだよってことを言いたくて、ってとこもあります。

白黒写真が灰色によって成り立ってるみたいに、灰色ってめちゃくちゃ色々な色があって。それって凄いかっこいいし、灰色は全部一緒なんじゃなくて、灰色の数だけ無数の答えがあるのかなって思っ

壊すことはリスクなことであって、確かに失うものとかもあるし、でも安定を取って、平穏を取って、ずっと変わらないところにもつまらないって。新しいことがしたいし、新しい自分になりたいし、でもそのためには今までの日々も今までの自分も壊さないとけないんです。

だから壊すんです、壊したいんです。壊してほしいんです。美術のセカイの額縁は確かに綺麗で丈夫で安心するんですけど、それは美術の世界を壊って狭めてるんじゃないかなって。新しい美術を知れたら、あわよくばそれを作れたら、それは幸せなんじゃないかなって。